一縷の涙

瑞希　祐作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一縷の涙

【Ｎコード】
Ｎ４１１８Ｇ

【作者名】
瑞希　祐作

【あらすじ】
ある日バーチャルな世界で出会った彼女を求めて私は旅に出る。
果たしてその結末は？

1．終わりのはじまり

私は今、とても眠たかった。でもまだ眠るわけにはいかない。今の気持ちを例えるなら深遠のきわの手すりも無い狭い道を、眩暈と闘いながら歩いているような感じだった。いつ足元を踏み外すのだろう？　もう次の瞬間かもしれない。大きく口を開けている暗い闇の中に私が吸い込まれていく準備は既にできている。ただ私はその誘いに必死に抵抗して落ちないように耐えているだけであった。

どうしてだろうか？　なぜそんなに眠るのを拒む必要があるのだろうか？

ほんの少し足をずらせば、痛みも無く苦しみも無く永遠の安らぎにめぐり逢えるのである。受け入れさえすればいいのだ。でもそのあと一歩が踏み出せないのである。

怖いのか？　いや違う・・・。どうして？

彼女のことが気にかかっているのである。

手のひらを胸にあて、彼女のことを思い出す。もしかしたらあのときあの一言が言えれば、私の人生は別の方向に向かっていったはずだった。でもそれは今となってはもはや叶わぬ「夢」。時間を戻すことは神様でもなければできるはずの無いことだった。今の私にできることといえば・・・、ただこの現実を静かに受けとめること。そして・・・。

喉が少し渇いてきた。もう一杯だけ水を飲もう。

水差しからコップに注がれた水は、私の喉に瞬く間に流れ込んでいった。

「あぁ、気持ちが良い。」

普段あまり吸わない煙草が無性に吸いたくなった。セカンドバックから取り出し火をつける。いつもは吹かすだけで何も感じないのだが、今日のほろ苦さは何か特別なもののような気がする。

どうして？　これが最後の一本だから？

しばらくして、朦朧とした意識の中で書き綴っていた手紙の筆を置くことができた。
眠たくなってきた。もういいだろう。
私は灰皿に煙草を置くと、疲れた体をベットに横たえた。心臓が静かに鼓動を響かせている。天井を見上げるとふとあまたの星が流れていくような気がした。
私は「夢」への扉を静かに押し開けていった。

2. 出会い

私が彼女とはじめて出会ったのは今年の一月末であった。「出会った」というのが必ずしも適切な表現ではなかったかもしれない。なぜならどこかの街角でふとした偶然に出会ったとか、誰かの紹介で知り合ったとかいうものではなかった。

そう、彼女との出会いはコンピュータのネット上、いわゆる「バーチャル」な世界での出来事だったのだ。

「チャット」と呼ばれるリアルタイムのコミュニケーションは当時既に多くのサイトで運営されていた。各人が自分の発言を文字にし、顔の見えない世界中の人がいる会話の場に送るのである。それを読んで相手が返事を返す。その繰り返しでお互いの関係が形成されていくようなシステムなのである。もちろん一般的なくだらない話から、日常会話に始まり、趣味やサークルでの仲間を探したり、はたまた恋愛や結婚相手の出会いを求めるケースなど人様々である。私が彼女と知り合ったのは、その中の他愛もない「海外とのふれあい」なるチャットルームであった。

最初彼女は手探り状態であった。全くの初心者だったのである。レスポンスの遅さにあきれながらも、「どこに住んでいるのですか？」とか「何をやっているんですか？」などと初歩的な話から私達の会話はスタートした。いつも思うのだが、初対面の人と話をすると、気分は新鮮であった。何度か話をしているうちに、彼女の方も慣れて来た。何度か回を重ねるごとに、いろいろな話をするようになり、話し込むと一、二時間くらいかかることも多くなった。そうして話しながら、ネットの向こう側の彼女はどういう人なのかと言葉のやり取りの中から想像していくのである。言葉のパーツひとつひとつ、そしてその組み合わせから自分なりの彼女像を私は膨らませはじめていた。

彼女は二十五歳の大学生であった。出身は関西で昨年の七月から

カナダのほうに留学をしていた。元々パソコンは使っていたそうだが、こういうネット上のコミュニケーションに参加したのは、私と会ったその日が初めてであったようだ。まさに私は彼女が「ネットデビュー」を果たしたその第一号の記念すべき相手だったのだ。

そうこうしながら、我々の「交際」ははじまったのであった。

毎日のメール交換、私は仕事で家に帰ってくるとまず真っ先にメールの確認をするのが日課となった。彼女はほぼ毎日と言っていいくらい送ってきてくれたからである。学校のこと、友達のこと、住んでいる街のこと等々。時には本当につまらないことを大きな風船のように膨らませて、ジョーク交じりに書いてみたり、海外に一人でいる寂しさを切々と語ってきたこともあった。

週末になれば時間を決めてネット上でのデートを楽しんだ。顔も見えない、言葉も聞けない、ただ文字だけのやりとりで過ごす時間が私と彼女の間で何よりも代えがたい大切なひと時となっていったのである。

いつしか彼女は私を「心の支え」だと言ってくれるようになった。

最初の頃は彼女のほうが一方的に話し手となり、私は聞き手であった。ところが次第に彼女とのやりとりの中で今まで見たことのないような私の一面がひとつ、またひとつと現れはじめたのである。そして大事にしまってあったものを心の引き出しからひとつひとつ出すように彼女に吐露していくようになったのである。仕事に忙しくて大変な日々。家族との摩擦、特に子供との心のすれ違い。そう私はどこにいても常に何かに追いかけられていたのである。プレッシャーを背負いつつ、気がつけばその時身も心も疲れきっていたのに気づいたのであった。

彼女はそんな私をやさしく包みこんでくれたのである。

3．ニューヨーク

知り合ってから二ヶ月がたった。もうその頃にはお互いに無くてはならない存在になってしまっていた。

ある日彼女は友達とニューヨークに行くと言い出した。

今まで世界各地を旅したことがあるとは言っていたが、彼女にとってニューヨークはおろかアメリカ自体に行くことは初めてであった。

私は何度か仕事で行ったことがあったし、数人の友人が現地の駐在員として勤務していた。メトロポリタン美術館、ティファニー、ブロードウェイをはじめとしていろいろなことを知識として教えてあげた。話をしていると彼女のうれしそうな子が見えてくるようであった。会ったことも無いのだが、自然と彼女の顔が目に浮かぶ。それは不思議な感じであった。

ふと思った。

「彼女に何かをしてあげたい・・・、しかしいったい何ができるのであろうか？」

そんな思いが彼女の旅行の日程が近づくにつれて次第に強くなっていった。

私が悩んでいたちょうどその時、ニューヨークの友人が二年ぶりに仕事で電話をかけてきた。用件自体は簡単なものだったので、ほんの数分で片がついた。その後はお互いの近況報告に花が咲き、会社の電話であるにも関わらず話し込んでしまった。彼が赴任する際、ニューヨークでの再開を約束していたのだが、ずっと果たせずじまいであった。それもあって本当に懐かしい友人の声であった。

長電話をしてしまった最後の話のついでに、「今度友人が行くので何とかしてもらえないか？」と頼んだところ、彼は二つ返事で引き受けてくれた。

このことは彼女には内緒だった。そしてニューヨークに行く当日

になった。
　彼女はホテルに到着すると。ブロードウェイのミュージカルのチケットと小さな花束が届いていてびっくりしたと、メールが贈られてきた。メッセージプレートには、私の名前と「ささやかなプレゼントをあなたに・・・。」というのが添えられていたそうである。
「彼もなかなか心憎い演出をするものだ。」と思う反面、私自身も少し恥ずかしくなった。
　その後彼女はニューヨークでのバカンスを友達と一緒に楽しんだようであった。
　数日後、彼女は短い休暇を終えてまた自分の街に戻ると、ニューヨークでの出来事やチケットの御礼を長々と綴ったメールを送ってきた。「何もそこまでしていただかなくても・・・。」といたく恐縮している風でもあったが、その文章から本当に喜んでいる様子がにじみでていた。特に小さな花束が気に入ったようで、「奥様にもそんなことをされるんですか？」などとやんわりとした質問もあった。
　この一件で彼女と私の距離はぐっと縮まったのである。私はそれがうれしかった。
　翌日私はニューヨークの友人に御礼のメールを送った。その返事には、
「今度は本人が来てくださいね！　お待ちしています。」という内容が書かれていた。今回のやりとりがきっかけで、彼ともまた忘れかけていた友情を呼び起こすきっかけにもなったのである。
　一方そのころ、私は重大な岐路に立たされていた。はからずも難しい仕事のプロジェクトを昨年後半から任されていたのだが、それが遅々として進んでいなかったのである。来る日も来る日も胃の痛くなるような仕事に忙殺されていた。
　おまけに妻が病気で一週間ほど入院することになったのだが、その間小さな子供の面倒も含め一気に私の負担は重くなった。元々子供との付き合いはうまくなかったので、こういう緊急事態に対応す

る術を知らないのも事実であった。昼間は仕事で、夜は子供の面倒で一日中気を休める暇がなく、夜ようやく子供が寝付く頃には見も心もぼろぼろになっていった。

唯一の支えは彼女とのメールのやりとりだけであった。

家族には打ち明けられない悩み、やり場のないストレス。そんな辛さも彼女のメールを読むと、氷が溶けるように消えていくのである。彼女に話をすることで気持ちがすっきりしてくる。そんなやり取りを繰り返す日々が続いた。

やがて私は彼女に対するものが、「愛情」になっていくのを自覚するようになっていった。

しばらくして妻が退院し、仕事も少しずつではあるが軌道に乗り始めると、私も少しは落ち着きを取り戻すようになった。

私は一時的に心の平安をとりもどした。

4．探りあい

彼女とのやりとりはメールと週末のチャットだけであった。いつも話すことは仕事や学校のこと、身の回りで起きたこと、趣味・料理・政治経済・心理学、時として恋愛論その他諸々と多岐にわたっていた。でも不思議なことに自分たちのことについて、特に外見とかについてはなかなか話題に出さなかった。

ある日チャットをしていると、今までタブーとされていたその話題に、どちらからともなく触れ始めた。触れ始めるとお互い同士が気になる。既に知り合ってからかなりの日数が経過しており、交換したメールも当に百通以上になっていれば、そうならないほうが逆に不思議なのである。そういう意味で、お互いに「もっと良く知りたい」と思う欲望の素地は十分にできあがっていたのである。「どんな感じなの？」とか「誰に似ているの？」「背はどのくらい？」とかそういう質問からはじまった。さすがに相手が女性なので、「体重はどのくらい？」とか「やせてるの？　ぽっちゃりなの？」と言うことは聞けなかったが・・・。でもそういう月並みな質問からお互いの手探りの心理戦は開始されていったのである。

「相手に嫌われたくない」という気持ちでもやはりネットの中では別人格というのが当たり前の世界で、「自分をできるだけ自分の姿で相手に受け入れてもらいたい」というちょっと矛盾した感情がお互いにあったかもしれない。

特に私のほうは彼女よりも十歳も年上、おまけに妻帯者でもあった。この時点で既に彼女に対する「恋愛」には大きなハンディを背負っていたのである。このことは彼女と交際を始めた時にきちんと話をしていた。でもその頃はこんなに真面目な付き合いになるとは思っていなかった。

しかしながら時間が経過するにしたがい私の心は自分の気持ちとは裏腹に彼女の方へゆっくりと惹かれていってしまった。妻は愛し

ていたが、その感情とは別次元の彼女の魅力に溺れていったのである。

もはや彼女なくしては自分は維持できない。

当然のことながらそういう状況になれば彼女のことをもっと知りたくなる。「彼女はいったいどんな顔をしているのだろうか？　声は？　姿は・・・？」　この日の私の一言一句はまさにそれを探すことにのみ傾けられていた。

一方で彼女の方も私のことを知りたがっている様子も痛いほどわかっていた。お互いに相手からの質問に注意深く答えつつ、「ところであなたは？」といったようにリピートして聞き返すというチャットの高度なテクニックを駆使しながら、相手のベールを一枚ずつはがしていくのである。まさにそれは好きな女性とひとつになるあの時と同じような感じがする。はやる気持ちを抑えつつ、ゆっくりと相手の出方を味わいながらのコミュニケーションなのである。

彼女の言葉の使いまわしや、表現等からひと際抜けた知性の高さが伺われる。それが私にはうれしかった。こういうチャットだと出会いの機会は多いにしても、そういう人に出会える可能性は極めて少ないと聞いていたからだ。「きっと素敵な人だ！」と自分に言い聞かせるたびに胸が高鳴る。このとき、何年も忘れていたあの恋のときめきを私は再び感じていたのであった。

「とってもやさしいお兄さんみたいですね！」

彼女の言葉はこれで締めくくられた。

「あぁ・・・良かった。彼女に嫌われなくて・・・。」

それが私の実感であった。

そして数日後、彼女は突然私の声が聞きたいと言い出した。私も彼女とは話をしてみたかった。その旨を伝えると、彼女は留学先の電話番号をメールに書いてきた。私はそれを見たとき、思わず息を飲んでしまった。「ここに電話すれば本当の彼女に触れることができる・・・。」そう思うと、自分の気持ちは次第に抑えきれないものになっていった。

しかしながら、私は何日もの間、電話することができなかった。するべきか否か迷っていたのである。彼女への気持ちを自覚している自分、既婚者である自分、恥ずかしさに戸惑っている自分など、いろいろな感情の倒錯に私は悩んでいたのである。

やがて一週間後、私は意を決して彼女に電話をかけると宣言した。

5. 電話

彼女との時差は十三時間あった。したがって日本のお昼に電話をかけると向こうは夜中の一時。でも学生の彼女にとってみればそんな遅い時間でも勉強に一息つけるような時間だったのだ。

私は早めのお昼に出るといって、近くの公園まで出てきた。ここに来れば顔見知りの人間に出会うこともないだろうし、携帯電話も電波が微弱で途中で不意に切れるということもないだろう。安心して電話ができる。私は奥の方の誰もいないベンチに腰掛けると、カバンからメモを取り出した。メールでもらって番号を何度も確かめた後、思いっきり深呼吸してから電話をかけてみた。

呼び出し音が続く・・・。本当に長い時間に感じられた。「第一声は何ていうのだろうか？」と考えながら・・・。

「ハロー？」と電話の向こう側から澄んだ声が響く。私の想像通りの声であった。

「もしもし・・・。」と言ったのだが、その後の声が出てこない。僅か数秒の間に私の喉は緊張でカラカラになってしまっていた。

緊張している自分、それに彼女は気がついたようだった。

「あ！　こんばんは！　はじめまして・・・。」

その言葉で私は我を取り戻した。

「あ、いいえ、こちらこそ。はじめました。夜分遅くに電話してすみません。勉強の邪魔じゃ・・・、なかったんですか？」と何とか言葉をつなげた。

「え、ええ・・・。大丈夫です。」彼女も答える。でもその声は、最初よりも緊張感が増していた。

「あ、あのぉ・・・。」とその後の言葉が続かなかった。彼女もそうだった。お互いに緊張しすぎて何をしゃべっていいのか、言葉にならないのである。

今まであれだけメールのやりとりをしたり、チャットでしゃべっ

ていたりしていたのだが、いざ本番になって会話にならないのである。

「・・・・・・。」何度も沈黙の時間が続いた。そして・・・拙い会話が始まる。

何度も沈黙と拙い会話が続いた。緊張の呪縛からどちらも抜け出せないでいた。

彼女とのファーストコンタクトはこうした重苦しい空気の中、それでも約十分ほど続いた。決して話が弾むという雰囲気にはならずに・・・。

私は電話を切った。初めてとしては失敗ばかりのものであっただろう。でもなんとも言えない感覚が残った。このコンタクトからは何も得ることはできなかったのであろうか？　いやそんなことはない。彼女の声が、肉声が聞けたのだ。今まで二次元の世界にしかわからなかった彼女の存在が、初めて三次元の世界に姿を現したのである。それだけでもすばらしい収穫ではなかったのだろうか？　「彼女は実在するのだ！」その事実だけでも私は満足できるすばらしいものであったのだ。

彼女の声が耳から離れなかった・・・。

仕事を終えて帰宅すると、プライベートのメールをチェックした。彼女からのメールがあった。急いで開いて見る。そこには今日の彼女の感想が書いてあった。

「いろいろなことをお話したかったのですが、でも緊張をしてしまいました。ごめんなさい。声を聞いて安心しました。優しそうな人ですね。イメージ通りでした・・・。」と綴ってあった。

私はうれしくて飛び上がりそうになった。

彼女のメールには続きがあった。

「私のことはどうお感じになられましたか？　少し内気に感じられたかもしれませんが、本当はもっと勝気なんですよ！　今度お話するときはもっとしゃべれるように頑張ります！」と書かれていた。

私は彼女の声がイメージ通りであったこと、こっちももっともっ

と話したかったこと、素敵な女性であろうこと等々をしたため、返信した。それと併せて週末のネットでのデートの約束も入れておいた。

ネットでのデートはこの電話のことがもちろん中心になった。どうしてネット上なら簡単に話ができるのに、メールなら情感をこめて話ができるのに、なぜ電話だとそれができなかったのか？　これだけで延々二時間以上も話が続いた。でもその中で結局はお互いに心遠からずの存在であること、その意識が言葉という三次元的手段ではまだ十分に表現できないのであろうということになった。

ちょうどこのデートが終盤に差し掛かったこと、どちらからともなく、「あの声の人（すなわちお互い同士なのだが・・・）はいったいどんな顔をしているのであろうか？」という話題になった。誰に似ているとか、性格はどうだとかいう内容のものだが、今まで二次元の付き合いしか知らなかった者同士があの電話をきっかけにしてお互いを三次元のキャンパスの上に描き出そうとしたのである。自然の成り行きと言えばそうなのだが、少し怖いものがあった。

「実態を見せること。」それが私と彼女の一番のハードルであることは間違いない。そしてそれはいつか通らねばならないことでもあった。

その日の最後のやりとりの中で、お互いの写真を送りあおうということになった。

6. 写真

四月の初め、いつもの年と同じように桜が咲き乱れる季節になった。この時期になるといつも日本にいて良かったと感じられる。

淡いピンク色の花は私たちの気持ちを和ませてくれる。そよぐ風に誘われた優しげな陽ざしは、この国にいなければ味わえるようなものではないだろう。

「彼女の街はどうだろうか？」

この春は、桜の木を見るたびにそう考えていた・・・。

ある朝、私は上司に呼ばれた。

今、携わっているプロジェクトの進捗状況と今後の進め方に関する相談であった。私のやっていた仕事は医療用新薬のマーケティングリサーチであった。この冬から新薬の提携先を国内外に探していたのだ。ところが、同業他社が出し抜く形で上市するという発表をしたものだから、ワークしていた国内の交渉相手先からクレームがつき、交渉決裂寸前の事態にまで追い込まれた。その後出し抜いた会社の新薬に致命的な欠陥が見つかり、クレームは取り消され、元の鞘に収まる形にはなっていた。

現時点では、仕事自体はようやく落ち着きを取り戻し、順調に進みはじめだしていた。

上司が私を呼んだのは他の人間が担当している海外の提携先との問題であった。上市を決めたとは言え、国内の販売量だけでは事業としてペイすることが難しく、早い段階から提携先を海外に探していた。最終的には二社に絞られていたのだが、そのうち一社が昨日になって急に交渉から降りると言い出したのだ。残り一社は現在スペックの検証中で、もう少し時間がかかるということであった。

「事によっては、ニューヨークに行って相手と直接交渉をしてくれないかね・・・？」

これは事実上の海外出張命令であった。私も何度か海外に行くこ

とがあったが、それほど頻繁と言うわけではなく、とりたて米国への出張は数年ぶりのことであった。時期的なものは相手のスペック評価後ということであったので、進捗状況からする限り、６月の後半になりそうであった。

この話を受けたとき、何故か彼女の見えない顔が、ふと脳裏をかすめた・・・。

「もしかしたら会えるかもしれない・・・のか？」

そういえば彼女の住んでいる街はニューヨークから飛行機でそれほど遠くない。そう考えると突き動かされるように、いてもたってもいられなくなった。自分の感情が抑えられなくなっていたのである。そして・・・メールを送った。

彼女の方からも直ぐに返事がきた。びっくりした様子が一緒に綴られていた。

「もし本当に会えることになったら、それは素敵なことですね・・・。」

その日からしばらくの間、彼女と私の話題はこの出張に併せての「実際の出会い」がテーマになった。

そんなある日のこと、家に帰ってみると見慣れないエアーメールがポストに入っていた。彼女からのものであった。私は誰が見てるはずもないのにそそくさとその手紙だけを自分のバックにしまいこんだ。

その中にきっと彼女の写真が入っているはずだった。私は「ついに来た・・・。」と胸の鼓動が高鳴るのを感じられずにはいられなかった。ところが、いざ開くという段になると、なかなか開けないものである。早く見たいという願望はあるのだが、隣の部屋には妻もいて、知られたくないという葛藤もある。自分の部屋でただ時間だけが過ぎ去っていくのであった。

ようやく深夜になり皆が寝静まったころに、私はその手紙を開いた。

黄色の薄地に書かれた文字はまるで書道の先生のように上手であ

り、優雅であった。それを書いた人間の人柄というのがわかるような気がした。
レターナイフを入れる。緊張の一瞬。中には便箋が一枚と丁寧に包まれたものが入っていた。
「前略・・・。」ではじまる文章にはとても品位が感じられた。やはりいいところのお嬢様に違いない、と想像を膨らます。何度も繰り返し読んでから、もうひとつの包みを開いた。
写真が二枚入っていた。
一枚は彼女自身のポートレイト。もう一枚は友達と二人でどこか旅行に行ったときの写真らしい。
写真の中の彼女は美しかった。
淡いピンクのワンピース、どちらかというと細目と言うか華奢な感じ。全体的に肌の色は白く、服から伸びた手足がすっとしていた。きっと抱きしめたら簡単に折れてしまいそうな感じがした。髪の毛はストレートで肩の先まで伸びていた。左右の一部を三つ編みにしているところが、また清楚で良い。顔は細めで目がくりくりっとしている。鼻立ちは端正で、かおからしてその育ちのよさがにじみ出てる。美しさは内面から出てくるようであった。おしとやかさがにじみ出ている。まさに「深窓の令嬢」という言葉がぴったりである。
正直言って、予想以上に想像通りの「彼女」がそこにいた。
私はうれしさのあまり大声で叫びそうになった。しかし、次の瞬間、十日前に送った私の写真を彼女はいったいどう思っているだろうか？　と考えると、不安になった。
とりあえず彼女には写真が届いたということはメールした。もちろん「とても素敵な方ですね！」という言葉を忘れずに。それと恐る恐る自分の写真は届いたかどうかもたずねて見た。
私の写真は自慢のスポーツカーと南アルプスの大自然をバックにしたものと、あとは友人たちとお酒を飲んでいるものだった。どちらかと言えば、写真映りが自分的にはいつも今ひとつだった。その中でもこの二、三年間のものではまともなのはこれだけしかなかっ

た。元々背は高いし、体格は太くも無く細くも無くといった感じで、人並みに見劣りするようなものではなかったが、顔に関してはあまりもてたこともなかったので、いまさらながら自信は失せていく一方だった。

その結果は意外に早く、翌日彼女から返事が来た。

私の感想に関しては、「本当はそんなにおとなしいというほどではありません。どちらかというと勝気なほうですよ！　実物を見たら極端に違いすぎて嫌われてしまうかも？（笑）」と書いてあった。

そして、私の写真については・・・、

「実は今日届きました。拝見させていただきて、とても優しそうな方という印象がしました。本当に素敵なお兄さんといった感じで・・・。私は一人っ子なものですから、うまく想像ができませんが、こんなお兄さんがいたらうれしいですね！　やっぱり想像通りの方でした。」とコメントされていた。

「『想像通り』っていうことはつまりＯＫということ？　彼女は私を受け入れてくれたということか・・・。」と勝手に自分で思い込んで、そしてにんまりしてしまった。

遥かに遠いかなたにいると彼女と私の間に、今長い橋がかかったような気がした。

「これを渡っていけばいつか彼女にめぐり逢える・・・。」と思うと、それが私の大切な夢になった。

7．二つの事件

二週間後私の海外出張は六月下旬と決まった。日程は約十日間。仕事は四、五日程度で終わるのだが、ニューヨークの友人からの誘いもあり、出張にあわせて少し早めのひとりだけの夏休みをもらえるように上司に頼み込んだ。もちろんこの日数には彼女とのランデブーも含まれていた。何度も連絡を取りながらスケジュール調整をする日々が続いた。

海外出張が決まるまで、彼女の住んでいるところについて詳しく言及したことはなかった。カナダの東部としか具体的には聞いていなかった。というのも、本当に彼女のいるところまで自分が出かけるとは思っていなかったからである。よくよく聞くと、彼女が住んでいるのはカナダの首都、オタワの近郊であった。この街は元々フランス領ケベックとイギリス領オンタリオの境界線上に作られた街である。したがって両国の文化が融合しており、北米大陸の中でも少し趣がかわった場所らしい。彼女はそう言っていた。日本に居て思うのだが、このカナダ東部というのは以外になじみが薄い場所であった。はっきり言って、セントローレンス川沿いにある緑と湖の街、と言う以外これといってイメージすることができなかったのである。

彼女のところには週末を含めた三泊四日の予定で行くことにし、宿泊先のホテルを探してもらうことにした。私自身も航空会社に予約をいれ、渡航のための手続きに入った。ゴールデンウィークが始まるころにはおおよそのスケジュールを確定することができた。

ちょうどそれと前後して、二つの事件が起こった。彼女と私の双方でそれぞれ起こったことであった。

彼女の事件は、パソコンが壊れてしまったことである。どうも宿題とかをやっているうちにふと珈琲をこぼしてしまったらしいのだ。いきなり彼女から泣きそうな声で電話が入ったときには、「いった

い何が起こったのだろうか？」とびっくりしてしまった。修理をして直るまでには一週間くらいかかるらしかった。メールだけ通じないのであればよかったのだが、ちょうど間の悪いことに彼女がこの時期別のアパートに引っ越すことになっていたのだ。彼女は携帯電話を持っていなかったので、連絡には家の固定電話を使うしかなかった。だからこの引越しをして新しいアパートに電話が入るまでの約二週間、全くというほど連絡が取れない状態になってしまったのである。非常にもどかしく歯がゆい日々をお互いに経験することになった。

特に私の場合は、もうひとつの事件も絡んでしまい、彼女と連絡をとれなくなったことで、精神的にかなり追い込まれることになったのである。

それは妻との関係であった。

結婚するまでにかなり長い間付き合っていたこともあり、まだ五年と言えどもお互いにかなりの倦怠期に入っていた。おまけに子供が小さいこともあり、二人の時には感じなかったお互いの生活への制約が徐々に増してきた。私は子供との相性があまり良くなかったこともあり、ここ一、二年の間、妻との口論が絶えなかった。今回も発端はささいなことであったのだが、私も精神的に落ち着いていなかったせいか、お互いの感情のすれ違いは急激に膨らみ別居という事態になってしまった。

妻が居なくなってわかったことがあった。私は既に両親が他界してしまっていたので、一人で生活をすることは文字通りしばらくの間、天外孤独を意味するものであった。

一人になってみると全く持ってやりきれない。大きな心の支えである妻と新しい支えである彼女の両方を一度に失くしてしまったのである。まさに私の心情は何も見えない暗い大海の中に放り出されたようであった。

私はそういうことを忘れようと仕事に没頭しようとした。しかしそれもできなかった。何か緊張の糸がぷつりと切れたようで、集中

することができなかった。
結局のところ、彼女とメールが再会するまでの間、ただ周りに流されるだけの抜け殻の日々を送ったのである。
それ故、彼女から「パソコンが直りました！　これからまたメールできるわね？」という連絡が入ったときはそれこそ一筋の光明を見つけたようなそんな感じさえしたのである。
それからの数日間、私は子供のように彼女に一方的にメールを送った。どんなにうれしかったか・・・。今でも忘れることができない。彼女はそんな私の言うことを優しく包み込んでくれた。そして子供を愛するような言葉で癒してくれた。
「やはり彼女こそ私の心の支えなのだ。」それが私なりの結論だったのかもしれない。
五月の終わりになり妻と私はどちらからともなく歩み寄りを見せ、別居は解除されることになった。それは子供に対する面子からだったかもしれない。一応表面上は元の鞘に納まったのである。
しかし私の心の中には、もう妻はいなかった・・・。

8．旅立ち

今年の梅雨入りは例年に無く早かった。六月の初旬から毎日しとしとと雨が降り続いていた。おまけに温暖化現象の影響か気温が高く、蒸し暑さがひどかった。少し歩いただけで衣服が汗のせいでまとわりついて、気持ち悪かった。この時期は一年の中で私が一番嫌いな季節だった。

私は海外出張の前にやらなければならない仕事が多く、日本全国を飛び回っていた。その方が妻や子供と顔をあわせることもないので、幾分気分的には楽だった。ただ出張の間は彼女とのメールをやりとりすることができず、それがとてもさびしかった。でももう少しすれば実際に逢えると思うと多少のことは我慢できるような気がした。

ところで最近彼女にはボーイフレンドができたようであった。年下の彼氏はフランス人だそうで、週に一、二回はデートをしているようであった。妻子もちの私には文句を言えた義理ではなかった。彼女が少しでもハッピーで過ごせるのならしょうがないかとあきらめていた。でもメールの回数が以前は毎日だったのに、最近は二日に一度のペースになってしまっていたことが、私の嫉妬心をかき立てている現実もあった。

ただ彼女が言うには、その彼氏は私と入れ違いにフランスに戻ってしまうということで、それまでの間仲良くしていたいということであった。それを聞いて不安ながらも私は少しほっとしていたのである。彼女を信じていたかったのである。

渡航する二週間前から私の仕事はまさに激務となった。国内の出張とそのレポート。夜のおつきあいで自宅に帰るのは毎日午前一時頃。それから風呂に入って、彼女にメールを書いて、といった感じでいつもベットに入るのは午前二時を回っていた。日々の睡眠時間は四時間程度で、我ながらよく体がもつものだと感心してしまった。

妻には海外出張の詳しい内容については言っていなかった。ただ昔からの友人の誘いで仕事が終わった後何日間かプライベートで米国に滞在するとだけ伝えておいた。妻の方も先月の口論に懲りたせいか、特に何一つ文句を言うわけでもなかった。

一週間前になり、久々に彼女に電話を入れた。受話器の向こう側の声は、体調がよくなさそうであった。

「風邪をひいたみたいなんです・・・。でも来週までには必ず直しておくので心配しないでください。」と言っていた。でもその言葉に心なしか悩み事があるような気がした。もしかしたらもうすぐ分かれることになる彼氏のことで少しナーバスになっていたのかもしれない。しかし、今の自分ではどうすることもできないのであった。ただ渡航の日を待つしかなかったのである。

そして出発の当日。その日もしとしとと雨の降る日だった。

私は午前中に最後の仕事を終えると、その足で空港に向かった。海外に出かけるのはちょうど一年ぶり。まして太平洋を越えるのはもう七年ぶりくらいかもしれない。ひとつ心配だったのは、最近英語を使う機会がなかったので、果たして私の語学力が向こうで通じるかどうかだった。昨年もシンガポールのほうに家族で旅行したとき、最初しゃべりることも聞くことも全くできなくて慌てたことがあった。時間が経つにつれ、元のカンが戻ってきてほっとしたが、今回もまた同じようなことにならないかと危惧していたのである。

途中電車の接続に手間取り、空港に着いたのは出発一時間前だった。急いでチェックインし、彼女やニューヨークの友人に頼まれたお土産を買い込んだ。銀行のカウンターで米ドルに両替すると、もうフライトまで間もなかった。

急ぎ足で出発ゲートから機内に乗り込む。自分の席を確認し、荷物を上のボックスに放り込むと、ようやく落ち着いた気分になれた。考えてみればこの一ヶ月間、せわしない日々が続いた。飛行機の座席に座ってようやく安堵感を覚えたのである。そう考えてみれば、本当に最近自分を振り返るということができなかった。そう思うと、

今このひとときの安らぎが妙に懐かしいものに感じるのであった。
乗客全員が機内に乗り込み、出発の準備は完了した。
飛行機はゆっくりと滑走路を移動し始める。
離陸にはしばらく時間がかかった。私には永久の時にも感じた。
・・・・・・。
「アテンション・・・。」のメッセージを合図に飛行機はゆっくりと大きな音を立てて走り始める。
数秒後、ふわりとその重い体は宙へと浮きあがっていく。上昇角が次第に増す。滑走路が、ビルが、そして街が、だんだん小さくなっていく。
そして雲の中へ・・・。
しばらくの間、揺れが続いている。
やがて雲を突き抜けるとまぶしいばかりの赤い夕陽が機体を照らす。
「美しいなぁ、日本は・・・。」と思うと同時に、「でも、もしかしたらもう二度とここには戻って来れないかもしれない・・・。」という気がした。
なんとなく・・・。
私は今、彼女のところへと旅立ったのである。

9．ニューヨークの日々

ニューヨークは暑かった。東京に比べるとずいぶん緯度が高いので、てっきり涼しいだろうと思っていたのだが、それは甘かった。実際は日本と同じでじめじめと蒸し暑く、ちょっと歩いただけでも汗をかいてしまうほどだった。街の至る所にある看板が、もし横文字でなかったらきっと日本だと錯覚をしてしまったに違いない。

ここに昨日着いてからの二日間は、過酷を極めたものであった。

到着した翌日まだ時差ぼけも直っていなかったが、既にアポイントをとっていた提携候補先へと出向いた。ところが話に入るや否や、我々の認識と彼らのそれとは全く違うものであることがわかった。どうやら仲介先として頼んでいたエージェントが、先方とうちの会社の両方に都合のよいことだけを報告していたもので、根っこの大事な部分について何も議論がされていなかったのである。当然私の話を聞いた相手先は事情のあまりの違いに驚き慌てふためいていた。硬直化しそうな状況が数分おきに起こりそうな状況であったが、まずは問題点を整理し、溝をひとつづつ埋めていくという根気のいる作業を続けた。元来米国人は、きちんと筋道を立てて説明し、それが理にかなっていれば、大抵の人は話をわかってくれるのである。そういう気持ちで丸一日にわたり現プロジェクトの内容を正確に説明しなおし、今後のマーケットについてプレゼンを行った。そして説明が終わる頃にはなってようやくお互いの認識を一つにまとめることができた。

ようやく一日を終え、へとへとに疲れ果ててホテルに戻ると、以前彼女がニューヨークに来たときに世話になった私の友人からメッセージが入っていた。「食事でもどうか？」というお誘いであった。本当であればこのまま今すぐにでもベットにもぐりこみたい気分でもあったが、もう彼ともかれこれ二年半会っていないことを考えたらやはり直ぐにでも会いたくなり、自分の体に鞭をうって出かける

ことにした。
指定されたイタリアンレストランはミッドタウンのサードアベニューの近くにあった。重いドアを押し開けて奥のほうに進むと、すぐに下におりていく階段があった。その奥は薄暗かったのだが、すぐにとても懐かしい顔を見つけることができた。
あの頃と変わらない友人がそこにいたのである。
「久しぶりだね、元気にしてた？」とお互いに握手を交わし、席についた。
それからワインを傾けながらお互いの空白の時間を埋める楽しい会話に花が咲いた。私は疲れていることなど、もう忘れていた。
「ところで今回は、どういう仕事できたのかい？」と友人がふと訊ねた。
私は今携わっている仕事のないようについて、差し支えない程度に彼に話をした。
提携先の話になったときに、彼の顔がにわかに曇った。
「どうしたんだい？　何か・・・？」と私は聞いてみた。
彼はふと考えながら、
「いや、その会社なんだけど、確か南米の方に多額の不良債権を抱え込んでいるという情報があるんだよ。それにね、水面下で他の会社がかなり大掛かりに買収工作をしているうわさもあるんだ。どちらにせよ、良い話は聞かないんだ。僕のほうでも調べてみるけど、一度君の上司にも確認をしたほうが良いかもしれないね。」
いやな予感がした。
その後この話は途切れてしまい、別の話へと切り替わった。
私もとりあえず忘れることにした。
当然切り替わった幾多の話の中には、もちろんこないだの彼女の話もしっかり入っており、追求された。私はその辺はうまく口を濁しながらのらりくらりとぎりぎりのところで逃げていた。そのお互いの絶妙な駆け引きがたまらなく新鮮で、「昔はこんな話をよくしたよね？　楽しかったね？」という風にどんな話をしても最後はそ

こに落ち着くのであった。
楽しい時間が過ぎるのは早いもので、あっという間に終演の時刻となった。我々は仕事が終わったらもう一度ゆっくりとジャズでも聴きながら、今一度語り合おうと約束し、別れた。
もう時間はかなり遅かった。
部屋に戻ると彼女のところに電話をした。
仕事はとりあえず明日までに終わるので、予定通り明後日にそっちに行くと連絡した。彼女の方もいよいよ現実の出会いが近づき、うれしさと戸惑いを隠しきれない様子であった。
約五分ほど話をして、空港で逢うことを約束し電話を置いた。
その後会社に電話をかけた。今の時間であれば日本はちょうどお昼ごろ。上司につないでもらい、今日の報告をした。当初の内容と現実がかなり食い違っていたことに関しては、上司もびっくりしていた。とりあえずそれは解決したことを報告すると、安堵した様子であった。
もう一つ友人からの情報について話をしてみた。私はそれが妙にひっかかっていたのだ。
「いや、そんな話は聞いたことがない。多分何かの間違いだろう。一応調べて見るが、君が心配することではない。それよりも仕事のほうをうまくやってくれ。」と上司は言った。
私は大丈夫なのだろうか？　という気はしたが、「はい」とだけ返事して連絡を終えた。そこまで心配しているだけの余裕がないのも事実であった。こういう風に仕事のことばかり考えていると、言いようのない気持ちに襲われる。とりあえずシャワーでも浴びて心を落ち着かせることにした。
温水を浴びながら、ふと彼女のことを考えた。思えば今彼女と同じ時間を共有しているのである。日本にいれば十三時間も時差があり、昼夜が逆転しているのである。いつも会えばこっちは「こんばんは」で、彼女は「こんにちは」であった。それが、今はお互いに「こんばんは」の時間を共有しているのである。初めて出会ったと

きには全く想像できなかったことである。あの頃は本当に逢えるなんてことは思ってもみなかった。それが実現するものとも考えることはできなかった。

いろいろな事件があった。でも何故か運命に導かれるかのようにここまで来た。不思議なことだ。多分他の人からみれば「そんなこと、映画でもあるまいし・・・。」と言うだろう。でも明後日にはそれが現実となるのだ。うれしいと思う反面、いったいどうなってしまうのだろうか？　という不安も覚える。ただ彼女がいなければここまで来れなかったのも確かである。

今思うこと、それは「彼女との出逢い」であり、今の私にはそれがすべてであった。

シャワーを終えると冷蔵庫から陣を取り出し一杯あおった。

それから鞄のなかの睡眠薬をとりだし、一錠口にした。私は妻が入院した頃から極度の不眠症に襲われていた。仕事のストレス、家庭での事情等々で常に緊張のしっぱなしだったからかもしれない。特に妻と別居状態になった時には、もうまともに眠ることができなかった。医者に行ってみたが、「仕事を軽くして、何か気晴らしをやったほうがいいよ・・・。」なんて当たり前のことばかり言われ、なかなか薬を出してもらえなかった。仕方なく、友人の薬剤師に違法と知りつつも拝み倒し、強めの睡眠薬を融通してもらった。これを一錠飲むと良く眠れるのである。ここしばらくの間、私は眠りにつくために薬の力を借りていたのであった。

エアコンを少し弱め、私はベットに入った。もちろん考えているのは彼女のことだけであった。

私は眠りに落ちた。

１０．前日

翌日私が仕事を終えたのは午後三時過ぎであった。昨日の続きとなった提携先候補との交渉は、苦労して信頼関係を築いたこともあり想像以上に順調に進んだ。予定では週末の土日をはさんで月曜日に先方は社内会議で了承をとり、早ければ火曜日の段階で正式契約という段取りとなった。要は事実上の内定を得たのである。私は無事任務を終了し、あとは契約書にサインをすれば良いだけとなった。

最近いやなことばかりでストレスが溜まりがちであった私にとっては、久々に心が晴れるひと時であった。

「夕飯を一緒にしよう。」という先方の提案もあって、それまでの間、時間をつぶすことにした。

ずいぶんひさしぶりに五番街を歩いてみると、以前に来たときとは違い本当に治安がよくなったと感じた。昨日も友人と話をしたときに話題になったのだが、現市長が治安面をここ二―三年の間に積極的に改善したからだという。昔だったら日中歩く時でさえ何か変なに巻き込まれないかとびくびくしていたものであったが、今は東京と同じように安心して歩ける。本当に良い街になったと感じた。

ふとティファニーの側を通ると、何の気なしに私は店の中へ入った。ショーウィンドーを覗くうちに「ティアーズ（涙の形）」の形をしたゴールドのネックレスを見つけた。写真の中の「彼女」がつけたらさぞ可愛いだろうなと思って、私は即座に買うことに決めた。妻以外の女性に何かを買うなんてことは、結婚してから今までなかった。やはり自分の中で何かが変わってきているのだ。これも彼女と出会ったからかもしれない。

明日になれば、彼女に逢えるのだ。仕事も無事に終わり、いよいよバカンスを満喫できるのだ。その嬉しさを私は街を歩きながら少しずつ噛みしめていた。

提携先に内定した先方との会食は実に和やかなものであった。「

将来をかけてのパートナーシップを築きましょう！」と握手されて、自分のした仕事の大きさに誇りを持つことができた。今が一番輝いているとき、それをしっかり感じることができた。うれしくてしょうがなかった。

その晩は夜遅くまで宴席が続いた。ホテルに戻ったころには既に翌日になってしまっていた。

少々ほろ酔い加減であったが日本に電話をかけ、報告をした。受話器の向こう側では、明らかにうれしそうだとわかる上司の顔が想像できた。私は報告を終えると週末はニューヨークを離れて月曜日の晩に再びここに戻ると話した。上司は「了解、了解！　ゆっくり休んでくるといい！」とねぎらいの言葉もいっしょにかけてくれた。

それからメッセージセンターにコールした。彼女からの伝言が入っていた。空港での待ち合わせ場所と時間、着ている服装などの説明と、「明日お会いするのを楽しみにしています。」というやさしい言葉が添えられていた。

私は翌朝の準備をすませると、シャワーを浴びてからベットに入った。気持ちがすっきりしてきたので、今日は睡眠薬の必要はなさそうだ。鞄から彼女の写真を取り出す。それをじっくり見ながら明日の出逢いを創造する。思わず顔がほころんでくる。

「いよいよ明日だなぁ・・、いや、もう今日なんだなぁ・・・。」

私は彼女とともに眠りについた。

夜が遅かったにも関わらず翌朝は早い時間に目が醒めた。私は簡単にホテルのラウンジで朝食を済ませると空港に向かった。まだフライトまでは二時間近くあったので、空港内のあちこちの店に寄って時間をつぶした。

ニューヨーク－オタワ間は国と国との重要都市を結ぶという割には、飛行機は三－四十人乗りのプロペラ機であった。私はプロペラ機に乗るのははじめてだったので、かなり戸惑ったが、「これも彼女に逢うための試練の一つかぁ・・・。」と考えることにした。出

国審査を終え定刻十分前には機内に乗り込むと、あとは未知なる国への思い、遥かなる「彼女」との出逢いに自分の意識は集中していた。

やがて飛行機は左のプロペラが、次に右が回りだした。徐々にエンジン音が高まると少しずつ前に進み始める。滑走路に向かう間、大きなジャンボ旅客機の間に挟まれた小さな機体は、今にもつぶされそうになりながらも自分の順番を待っていた。

十二時十分。定刻通り私を乗せたプロペラ機は一路オタワへと向かった。

11．空港

彼女は一人空港でたたずんでいた。

薄いピンクのブラウスに少し濃い藍のジーンズ。ふちの長い白い帽子をかぶっていた。髪は細いからだの背中ぐらいまで伸びており、ソバージュがかかっていた。顔立ちはすっきりとして良く、少し青っぽいアイシャドウが微妙にその美しさにアクセントをつけていた。

昨日彼女はここで恋人と別れた。そして今日、見知らぬ彼を待っていた。

それが運命だったのかもしれない。恋人と別れることは元々わかっていた。一ヶ月前に知り合った時に決まっていたのだ。お互いにそれを知りながら付き合っていた。わずかな時間で燃える恋もあると自分に言い聞かせて、その流れに身を任せたのだ。

彼女は寂しかった。ここに来て一年になるが、去年の冬に日本においてきた婚約者と破局した。そうなることは何とはなしに覚悟はしていたので、それほどショックではなかった。でもひと月、ふた月が経つにつれて何とも言えない孤独感に苛まれるようになっていった。

ある日買ったばかりのパソコンでネットサーフィンをはじめた。やがて日本語のチャットルームに辿り着いた。彼女には懐かしい母国語がそこにあった。この場所では忘れてかけていた言葉があった。その言葉に触れているうちに自分を凍りつかせていた孤独感が薄らいでいくのを感じた。それは・・・、彼と出逢ったからである。

彼女はパソコンを通して彼を知り、会話し、デートを重ねた。毎日欠かさずメールを送り、今日起こった出来事を彼に報告した。また彼女も彼からの返事を楽しみにしていた。それを読んでいると何か暖かいものを感じることができた。やがて彼女は無くしかけてきた心の拠り所を彼に求めるようになっていった。

彼には妻子があった。でもそんなことは日本とここととの距離を考

えれば小さなことだった。彼は悩んでいた。少しでも力になってあげたいと思うときもあった。励ましたこともあった。そうしていつの間にか、彼女にとっては彼は彼氏のような存在になっていったのである。

そう、あの日までは・・・。

彼女は自分のパソコンに珈琲をこぼしてしまい、それが原因で彼とメールができなくなってしまった。おまけに引越しも重なり、電話をすることもできなかった。完全に音信不通の状態でしばらくすごさなければならなくなったのだ。

孤独感がまた彼女を襲ってきた。とてつもなく寂しかった。

そんな時、その恋人に彼女は出会ったのである。

彼はフランス人だった。初めは学校でそれほど気になる存在ではなかった。でも何度か話をするうちにお互いに惹かれていった。特に彼女はバーチャル世界での恋愛を経験していたことが、逆にリアルなものへの渇望感を呼び覚ましてしまったのである。恋人はあと一ヶ月で自分の国に帰国することになっていった。それは彼女も理解していた。そうと割り切って彼女は結局その恋人と恋に落ちてしまった・・・。

一ヶ月の間、昼夜問わず終わりある恋を二人は楽しんだ。

昨日、その恋は終わった。彼女は空港での恋人との別れのとき、涙を流すことはなかった。

そして今日、また同じこの空港で、彼を待っている。

一縷の涙が、彼女の頬を伝わっていた・・・。

12．出逢い

飛行機は定刻を十分ほど遅れて到着した。初めて乗るプロペラ機は思ったよりも良かった。きっと天候が良かったことで、眼下に見える景色が想像以上にすばらしく感じたからかもしれない。特にセントローレンス川を越えてカナダ国内に入ってからは、文字通り「森と湖の国」といわれるような大自然が広がっていた。それは私がこれまで上空から見た景色の中で、指折りのものであったと思う。

ゆっくりとランディングした機体は長いアプローチを抜け空港の隅にその体を横たえた。乗客は足早に降りると入国審査のゲートに向かって行く。私もその人波を追って行った。

入国審査を終えバッケージクレームで荷物を受け取ると私は出口へと向かった。「この先に今までずっと逢うことができなかった彼女がいるんだ・・・。」と思うと、今までには感じえなかった旨の鼓動を覚えた。出口までは目と鼻の先のはずなのに、その距離が非常に遠く思えた。

そして・・・。

出口を抜けた瞬間、眩しさが走った。何か不思議な感覚が私をよぎった。

それはまるで長い時空の旅の後、新たなる世界に飛び込んだ迷い人が感じるそれと同じものだったかもしれない。

何秒間しか時が流れていないはず・・・。しかし私の中の砂時計は永遠に砂を下に落とし続けていた。まさに悠久のときを刻んでいたのである。

次の瞬間私は我に帰った・・・。

雑踏の中に彼女の姿を探した。彼女はまだ私のイメージだけでしかない。あの日受け取った写真を私はこの数ヶ月間まぶたに焼き付けてきた。でもまだ具現化されてはいないのである。

「どこにいるのだろうか？」必死で探しているものの彼女らしき

人は見当たらない。
不安と焦燥が私の中を駆け巡った。だが、次の瞬間、柱の影にいる白い帽子の女性が目に付いた。
彼女が振り返る。ソバージュのかかった長い髪、ピンクのブラウスに藍のジーンズ。ほっそりとした体にすっきりとした顔立ち。間違いはない。今まで写真でしか見たことがなかった彼女が、その狭い空間から飛び出してきたのだ。
彼女も「あっ！」と口を小さく開いた。私に気がついた。そしてゆっくりと私の方に近づいてきた。
目の前までくると、顔を少しうつむきがちにし、戸惑いを見せながらも私の名前を呼んだ。
「祐一さん・・・、ですね？」
私は小さくうなずく。彼女の顔に笑みがこぼれる。
「やっと、めぐり逢えたんですね・・・。」私は興奮して心臓が張り裂けそうであった。本当に、本当に彼女は存在したのである。それが、この瞬間に証明されたのである。
お互いがお互いを見つめあい、しばらくの間お互いは立ちすくんでいた。
ようやく金縛りがとけると彼女は私の荷物を持って、「さぁ、いきましょう。」と声をかけてくれた。私もその言葉に後押しされるように歩き出した。
とりあえず空港の出口でレンタカーをピックアップする手続きをすると、正面出口から出て右手の駐車場へと向かった。その間、彼女と私はこれまでずいぶんやりとりをしてきたことをもう一度復習しながら会話を続けていた。ネットのチャットと同じようにやはり最初はしどろもどろであったものが、時間が経つにつれて少しずつ流暢になっていく。彼女の存在と心が氷解し、私の意識の中に溶け込んでくるようであった。
私は文字や写真だけの二次元的なコミュニケーションではなく、こうやって三次元的に本物の彼女と向き合って話をすることに今、

幸せを感じていた。彼女もまたそうであったようだ。
初めての国の空は、既に夕方の五時近いにも関わらず昼間と同じ明るさであった。夏至を少し過ぎたころなので、最近の日没は九時すぎだと彼女は教えてくれた。
ようやくお目当ての車を見つけると、私はトランクに荷物を押し込んだ。彼女を助手席に座らせ、エンジンをスタートさせた。青色のムスタングゆるやかなスロープを抜け、郊外の道へと向かっていった。
まずは彼女の提案もあり、予約しておいてもらったホテルへと向かった。。市内へ続く道はまさに緑のアーケードであった。その中を彼女と私は滑らかに抜けていく。気持ちがよい。窓から入る風は彼女の帽子を静かに揺らしていた。その表情はとてもおしとやかで美しいものであった。
助手席で彼女はこの街のこと、自分の住んでいる郊外の場所、その他あちこちについて説明をしてくれた。しばらくするとハイウェイの右手のビル群を彼女は指差し、「あそこが私の通っている学校です。」と教えてくれた。
私はふと一番気になっていることをおそるおろる訊ねてみた。運転しているハンドルに少し力がこもった。
「ところで・・・、第一印象はどうでした？」
彼女は意表を衝かれたようにしばらく考えていた。
「えっ、そうですね・・・。素敵なお兄さんといった感じですか？　私は一人っ子なので良くわからないのですが。でも、ずっと想像していた通りの方でした。」彼女は指を口元にあて、上目遣いに言った。
「で、私はどうでしたか？」彼女は微笑みながら直ぐに切り返した。
自分のことばかり考えていたせいで、彼女のこの質問を私は予期していなかった。車を運転し平静を装いつつもありったけの言葉を捜している自分がそこにいた。普段の私が今の私をみたらきっと何

とも言えないほど「可愛いやつ」だったかもしれない。
「きっ、きれいな人だなぁって思って・・・。何というのかなぁ？　うん、やっぱり妹みたいな人っていうか・・・。あの・・・、その・・・。」今度は私が言葉に詰まってしまった。
照れながら頬を指で掻いている私を見て、彼女はくすくす笑っていた。
時折上空を過ぎていく雲が田園に映し出す影絵のアートをみな方、車は街への道を走っていった。

13．オタワの夜

時間は午後七時半、日本であったならこの時期でももう薄暗くなっている頃である。しかしオタワでは緯度が高いこともありまだ昼間のように明るかった。

空港から市内に入るとまずホテルにチェックインした。彼女が予約をとってくれたホテルはメインストリートでもとりわけ一等地に位置するところにあった。元々この都市はセントローレンス川の側にロンドンのようなイメージで計画的に作られた都市のようで、ホテルもヨーロッパの古城のようなロマンチックな雰囲気を醸し出していた。部屋も広く、普段住んでいる日本のマンションと同じくらい広いのではないか？　というくらいのものであった。

とりあえず自分の荷物を置き、彼女の好きそうな色の服に着替えてからロビーに下りていった。彼女はソファーで私が日本で買ってきた雑誌に目を通していた。

「お待たせ！」と声をかけると、彼女はにっこり微笑んだ。それから私達はダウンタウンのほうに向かって歩き出した。途中銀行によったり、そのあたりのお店を覗いたりしながらいろいろな話をした。お互いの事、仕事や勉強の事、家族の事、その全ては既にネットの中で何度も繰り返されてきたものであった。でも文字で見るのと次際に話をするのではやっぱり違う。今まで鉛筆で下書きしたものに、二人で絵の具を塗っていくような共同作業に思えた。

そして、二人の絵が完成した頃、ダウンタウンの一角にあるベトナム料理のレストランに着いた。

「それで、実際のところはどうでした？」彼女はワインを傾けながら私に尋ねた。

「え、いや本当に素敵な人だなあって思いましたよ。綺麗というか知性的というか・・・。」私はありったけのほめ言葉を捜してはしどろもどろに続けた。

「そうですか？　私の事？この街の印象をお聞きしたのですが・・・。」彼女は顔を赤らめながら答えた。
「あ！　そうだったのですか？　ごめんなさい。」自分のミスに気がついて、思わず自分も顔を真っ赤にしてしまった。彼女はワインに少し口をつけて、落ち着こうとしていた。
「でもそんなに言われるほど知性的ではありませんよ。」
「そんなことは決してないですよ！　今までいろいろ話したけれそ、いつも知的なセンスで満ち溢れていたし・・・。その・・・、私の周りにはそういう人あまりいないから・・・。やっぱり合ってみて素敵な人でした。うん！」　自分で納得するように言った。
「でも奥さんいらっしゃるんでしょ？　素敵な人じゃないんですか？　そういう方をほっといて出かけて来るのは大丈夫だったのでしょうか？　わざわざ私なんかに会いに、こんなところまで来るのに・・・。」　指を頬にあてながら、私に尋ねた。
「一応仕事で来たし、それにニューヨークに友達もいるから、大丈夫だよ。ほら、ミュージカルのチケットを取ってくれた人、覚えてるかな？」　空を見ながら私は答えた。
「ええ、覚えていますわ。そう、その節は本当にありがとうございました。そういえばあの時のお金、まだ払っていなかったですわね・・・。」
「そんなことはいいんですよ！　あのおかげで私も彼と再会できたのだし。そう考えるとあなたは私の運命をうまく良い方向に引き寄せる人なのかも知れませんね。それに対するささやかなお礼です。」
彼女は照れながら、うなずいた。　しばらく沈黙の時があった。
「でも・・・、本当にここまで来てくださったのですね。私はとてもうれしいです。」
やがて彼女は少し小さな声で、恥ずかしそうにつぶやいた。その顔がとても赤く見えたのはワインのせいだけではないことを私は感じていた。

そうこうしているうちに料理が出され、二人は食べながらも話を続けた。考えてみれば知り合って半年も経ちながら今日が本当の意味でのはじめてのデートだった。しゃべりたいことは山ほどある。最初こそお互いに緊張していたので何も言えなかったが、時間が経ち、おいしい料理を食べながら、お酒の勢いも手伝って次第に話が回りだしていく。一度氷解した水は次から次へと二人の心に流れ込んでいった。私は次第に料理の味を噛みしめて食べる余裕はなくなった。ただただ彼女との会話に全神経が集中していった。

食事を終えると、彼女の提案で近くのオープンカフェに場所を移した。時間というものは楽しいことをしているとあっという間に過ぎ去っていくものである。時間は既に夜の十時を過ぎていた。まだ空には少し夕焼けが残っていた。

彼女はモスコミュールを、私はジンを頼んだ。

「あの・・・、でも本当にお会いできてうれしかったです。ちょうど初めておしゃべりした頃、かなり落ち込んでいたんです。日本にいる彼氏とわかれて、自分でもどうしようもないくらい滅入っていたんです。でもあなたに励まされて立ち直れたんです。ありがとうございました。。」

「いえ、そんなことないですよ。」　私はそれほどのことしたかなぁ？　と思うと少し照れを感じてしまった。それを隠すように手を顔にやった。

「これからも・・・、あの・・・、私を支えて欲しいです。」

彼女の声はだんだんと小さくなり、最後には聞こえないほどになっていった。

私は優しく言った。「もちろん、私でよければ喜んで支えますよ・・・。」

彼女はそれを聞いてほっとしたと同時に、うれしそうに微笑んだ。

「あ・・・、ありがとうございます。」

その言葉には少し涙がにじんでいたような気がした。それが私にはうれしかった。こんなに自分を頼りにしてくれる人がここにいる

のだ。そう思うと若い頃にあった忘れかけている何かを思い出せそうな気がした。

「もう一度彼女と人生をやりなおせたら・・・。」そんな気持ちが私の中を駆け巡っていた。

二人の夜は果てしなく続いた。

14．モントリオール

翌日は彼女の提案でモントリオールに出かけることにした。モントリオールはオタワから東に百五十マイル。大よそ三時間弱の行程であった。天気は穏やかで、車の窓から入ってくる風がとても気持ちよかった。

二人とも昨日は夜遅くまで飲んでいたはずだったが、不思議とその疲れは残っていなかった。たった半日足らずで既にお互いは恋人気分になっていた。

どこまでも続くのどかな田園地帯を抜けると、やがてケベック州に入った。話を弾ませているうちにいつしか目的の街に着いていた。そこはニューヨークともオタワとも違う街並みで、フランス情緒を深く醸し出していた。私自身はヨーロッパに行ったことがなかったので、はっきりどういう風とはいえなかったが、至る所にフランス語の文字があふれていたり、街行く人々の言葉もちょっと巻き舌の甘い発音が、何となくそういう気分に私をさせていたのである。

私達はケベック大学の近くのサンドニ通りに車を止め、まずは近くのバーガーショップで腹ごしらえをし、その後市内観光へと繰り出した。セント・ローレンス川に向かって坂道を下り、市庁舎・裁判所等を通り旧市街を歩いた。彼女はいつしか私と腕を組んで歩いていた。

所々でお互いの写真を撮ったり、近くのドリンクショップでレモンたっぷりのレモネードを買ってふたつのストローで飲んだりしている光景を傍からみれば、きっと本当のカップルだと誰もが思ったことだろう。

私は見知らぬ街を楽しむというよりは、彼女の笑顔を見ているのが好きだった。彼女とつないだ手を離したくなかった。彼女のぬくもりをかんじていたかった。

「このままずっと・・・。」　私の脳裏にふとそんな思いがよぎ

った。
食事を終え、坂道を上っていくと、右手にノートルダム・モンレアル教会が見えた。
「ちょっと寄っていきませんか？」　彼女の提案に私はうなづいた。
噴水のある広場から正面玄関を見ると、北米最大といわれるほどの大きさは感じられなかった。しかし、一旦中に入ってみると驚くほど広く、遥か前方のほうまでずっと青い天井が続いており、その奥にはキャンドルに浮かぶ祭壇が本当に小さく見えた。私達はゆっくりと進みながら近くの席に腰を下ろした。
パイプオルガンの調べがスタンドガラスに跳ね返り、私達を緩やかに包んでいた。しばらくの間、二人はその音楽と時間の流れに身を委ねるだけであった。
どのくらいたったのだろうか・・・？いつしか彼女はつないでいた小指を次第に私の指の中にずらし、左手を私の右手に絡ませてきた。同時に私の腕の中にその身をもたれかけてきた。
「わ・・・、私、あなたの事・・・。」　彼女はうつろな表情で私に言いかけた。
その瞬間私は彼女を抱きしめていた。そのやわらかな薄紅の唇に自分の思いを伝えながら・・・。
しばらくして、重ねていた彼女の唇と体を静かに離した。
彼女の目から一縷の涙が流れると、また彼女は私に抱きついてきた。
パイプオルガンはその調べを止めることはなかった。
どれだけたっただろうか？　私達はやがて席を立った。そして出口のところでタクシーを拾うと、車の止めてあるところまで戻った。もう陽は暮れかけていた。
「遅くなっちゃったね？　とりあえず帰ろうか？」と私は言った。彼女は何も言わず、ただうなづいた。
帰路、彼女はうつむいたまま黙ったままでいた。やがて疲れたの

だろうか？　いつの間にか寝てしまっていた。
日本と違い明かりのないハイウェイはとてもさびしいものだった。でも彼女が側にいるだけで、私は満足だった。
オタワの町が見えるころには、時間はもう夜の十一時を回っていた。彼女はしばらく前から目を覚ましていた。彼女の案内で郊外の自宅まで送っていくことにした。
彼女の住んでいるところは、街の中心部から西の方に車で三十分くらいの静かな住宅街にあった。
車を家の間に止めた。しかし彼女は何も言わず黙ったままだった。
「どうかしたの？」　私は尋ねた。
「ううん、何でもないわ・・・。今日はありがとうございました。また明日会いましょう。」　彼女はやっと少し微笑みながら答えてくれた。しかし、その後また考え込んでしまった。
別れの言葉も言えず、しばらく沈黙が続いた。
「もう少し・・・、あなたと一緒にいたい・・・。」　彼女は聞こえるか聞こえないかわからないくらいの小さな声でつぶやいた。

その晩、私は彼女を抱いた。

15．鏡

彼女は鏡の前にたたずんでいた。昨日のことを考えていた。
あれからホテルに行って・・・、彼に抱かれた。
それは自分が求めたことであった。
どうしてそうなったのだろうか？　自分ではよくわからない。
でも・・・、終わったあと何かが違った。　彼の腕から離れた時、それがわかった。
「別れたあの人を愛していたから？」
そうじゃない。あの人とはそうなることが運命だった。それはそれだけのこと。自分でも納得していたじゃない？
「それじゃ、どうしてそう思ったの？」　鏡の中の「彼女」は問いかける。
彼は確かに優しい。奥さんや子供がいて、年齢も私よりずっと上だけど、そんなことは問題じゃないの・・・。それを差し引いたって余りある魅力が彼にはある。
そう、確かに素敵な人・・・。でも何かが違う。私が好きな「彼」は、その彼ではない。
「じゃあ、誰なの？」
そう、あの人はパソコンの中にいた。優しい言葉で私を包んでくれた。その「彼」と昨日の彼は同じ人。それは事実のはず。
「はず・・・？　どういうこと？」
やっぱり違う。言葉では表現できない。ただ、私の好きな「彼」は彼と違う人なの。
「彼」はいつも私の傍にいてくれた。いつも優しい言葉をかけてくれた。でも昨日の彼はその優しい「彼」とは違う。
そう、「彼」は私の心の中にいた・・・。
「心の中にいた？」　不思議そうにもう一人の「彼女」は問いかける。

私の好きな人はパソコンの中の「彼」。現実の彼ではない。それが今わかった。

「彼」とは現実の世界であってはいけなかったのかもしれない・・・。現実の恋と幻想の恋は違うのだ。

「現実の恋と幻想の恋って？」

別れたあの人とは、目で見て、声を聞き、肌で感じながら恋をした。あの人の考えること、感じたことを確かめながら次第に魅かれ、恋をし、そして終わった。それはそれで自分で納得できたことだった。

でも「彼」は違う。

「彼」との恋は常に文字を介してのものだった。彼の言葉を見て自分が想像した「彼」に恋をしていたのである。「彼」をイメージし、自らそれに溺れることを望んだのだ。ただ現実の彼が自分の考えていた「彼」とは違っていたのだ。

「どうして、溺れたの？」　悲しげな瞳をした「彼女」は問いかける。

わからない、どうしてもわからない・・・。

いや本当は、自分でも良くわかっているのだ。

それはきっと・・・、さびしかったから・・・。

遠い異国の地でひとり生活している自分。しばらく暮らすうちにどこかにこころの拠り所が欲しかったのだ。それは別に「彼」でなくてもよかったのだ。

ただ結果的に、恋愛と言う対象の方が溺れやすかったのが事実である。

彼との出逢いはすべきではなかった。彼は「彼」のままでいるべきだった。

「どうするの？　これから？」　最後の質問を「彼女」は冷たくなげかけた。

どうしたらいいの？

どうしよう？

わからない・・・。
彼女は泣いていた。
柔らかな朝日が窓の隙間から差し込んでいた。その光が彼女の涙を輝かせている。一粒、そして一粒と次第に大きくなって頬を濡らしていく。やがてあふれる涙と感情を抑えきれることができなくなり、彼女は顔を覆って鏡の前に崩れ落ちた。
鏡のなかの「彼女」はそんな彼女をやさしく見つめていた。

16．カフェテラス

朝、目が醒めたとき、彼女はもういなかった。サイドボードに今日の待ち合わせの場所と時間を書き残して自分の家に戻ったようだった。

彼女のぬくもりはまだこの腕の中にあった。

でも昨日どうしてあのようになったのだろうか？　あれで本当によかったのだろうか？

確かに日本を出発するときに、既に私の気持ちは決まっていた。私の求めているのは妻ではなく彼女であったのは確かだった。その愛すべき人と気持ちも体もひとつにできたこと、それこそが私が一番欲していたものであった。

私はうれしかった。でも、その反面、何とも言えない不安に襲われていた。

何かが違う。その何かを私は理解していた。

明らかに自分の愛してきた「彼女」が現実の彼女と違うのだ。パソコンの中にいた「彼女」はもっと強く、知的で、自分にとって常に何か新しいものを与えてくれるような存在であった。そして私を優しく包んでくれる人だった。

でも彼女は違う。

普通の女の子のようにくじけそうになりながらも一生懸命遠い異国の地で頑張っている。それはとても強いことなのかもしれない。でも常に誰かの支えを求めている。それが無くては生きていけないのだ。とてもか弱い存在なのだ。

私の求めている強い「彼女」とはイメージがだいぶ違う。それは事実であった。

それでも私は彼女を愛したいと思った。

それは既に私自身にも心を支えてくれる人がいなくなってしまったからだ。つまり彼女無しでは生きていけない状態になってしまっ

ているのだ。今の私は今の彼女とまるで同じ存在なのである。
「理想と現実のギャップ」　それは努力して埋めていこうと私は思っていた。
私はベットから起き上がると、時間を確認してからシャワーを浴びた。彼女との待ち合わせの時間は午後一時。国立美術館のカフェテラスだった。時間はまだ十分にあった。
珈琲を飲み、新聞に目を通した。日本ではないので特にこれといった情報が得られるわけでもなかった。テレビをつけて一応チャンネルを回してみる。相変わらず米国の景気好調な話題が流れている。
しばらくぼーっとした状態になる。その間中、「今日いったいどんな言葉を最初にかけたらいいのだろうか？」とか、「これからどうやってつきあっていくのがいいのだろうか？」などということが頭の中に浮かんでは消え、消えては浮かんでいた。めぐる思いはつきることがなかった。
やがてお昼過ぎになり、自分の部屋を出た。国立美術館まではホテルから歩いて十分くらいの道程であった。
入場券を買い、長いスロープを二階まで歩いて上っていった。突き当りのところを右手に行くと、直ぐに三階へのスロープがあり、その脇にはカフェテラスに向かう廊下があった。私はその廊下をゆっくりと進んだ。
時間は待ち合わせの時間までまだ五分くらいあったが、私は中を覗き込んでみた。
そこは落ち着いた感じのラウンジで、壁のあちらこちらにこの美術館らしい絵が飾ってあった。
よく見ると、白いワンピースを来た彼女が置くのテーブルに・・・、いた。
ゆっくりと近づいていくと彼女の方も気がついたようである。私は小さく手を上げながら彼女に微笑んだ。同じテーブルに座ると、アイスティーを頼んだ。
「昨日はごめんね・・・。」どういうわけかわからなかったが、

私から出た最初の言葉はこれだった。
「いいえ、こちらこそ・・・。あんまり気にしないで。でもはしたない女の子と思ったでしょう？　会って間もないのにあんなことになっちゃって・・・。」
彼女は下を向いて言う。
「そんなことはないよ・・・。」
「いいの、そんなことは・・・。私、寂しかったのかもしれない。日本においてきた彼と別れて、新しく見つけた恋人とも破局して・・・。その寂しさを忘れたかったのかも知れない。
彼女は初めて顔を上げて言った。
「そうかもしれないけど・・・、でもやっぱり失ったものが多すぎたからそれは仕方がないことだったかもしれない。でも昨日の私は単なる彼らの代わりだったわけではないでしょう？」
私は不安になって訊ねた。
「いいえ、決してそんなことはないです。あなたはいつも私に優しかった。私が彼氏と別れてずっと落ち込んだときも心の支えになってくれた。どれだけ救われたか・・・。あなたがいなかったら、私、本当に立ち直れたかどうかわからなかった。感謝してるんです。」
「いや、逆に感謝するのは私だよ。この半年の間、ずいぶん苦しんだんだ。でもそのときに絵理奈さんがいたからこそやってこれたのだと思う。そういうあなたに逢いたくてここまで来たんだよ。そして・・・。できることならこれからもずっと付き合っていきたいと思っている。」
私は押さえ込んできた感情を吐露するように彼女に言った。
しばらく何もない時間が過ぎた・・・。
「ええ、できれば私もそうしたいと思っています。でも・・・。」
「でも・・・、って？」
「あなたには奥さんもいるし、子供もいる。私との間でママゴト的な恋愛はできても、本当に好きになることはできないわ・・・。」

彼女は何か吹っ切るように言った。
「もう、私は妻との明るい未来はないと思っている。いつの間にか絵理奈が私の一番大切な部分になってしまった・・・。」
「それでも・・・、それでも最後に子供がいるわ。彼らの為だったらどんなことになっても結局元に戻ることができる。私、そんな気がするの・・・。」
彼女は強い口調で言った。私は何も言えなかった。
「それに・・・、あなたに抱かれてわかったの。私の求めている『あなた』は、あなたじゃなくて、パソコンの中にいる『あなた』だったの・・・。」
それは私には衝撃的すぎる一言であった。彼女も私と同じことを感じていたのだ。
「でも、バーチャルな世界と現実とのギャップは確かにあるけど、それはお互いに理解しあえるし、乗り越えられると思う。あなたとこの三日間一緒にいて、私も同じ事を感じた。でもあなたを受け止めることができると思う。」
私は言った。でも彼女は悲しげに答えた。
「私は・・・、無理かもしれない。」
いつしか彼女の声は涙声になっていた。
「もし、この間別れたあの人と出会わなければ私はあなたを受けとめられたかもしれない。でもバーチャルな世界と現実の恋愛を一度に経験してしまったの。それでやっぱり愛したい人は常に自分の傍にいなければいけないことがわかったの。私だってあなたを好きになりたい。でもあなたは明日帰ってしまう。そうすれば私はまた一人。遠い空を見つめ、物思いにふける日々が続くわ。もうそれはいやなの。」
彼女の目からきらりと光るものが見えた。
「私は、絵理奈が日本に帰ってくるまで待っている。それじゃだめなのか？　妻とのことはもう覚悟ができている。あなたさえ、『うん』と言ってくれれば私は必ず待っている。それでも・・・、無

理なのかい？」
私は苦虫を噛み潰すように言った。
「それは・・・、きっとできないと思う。時間が経てばまた人生も変わる。私達が今日と同じ日を、同じ気持ちをずっと持ち続けることはできないわ・・・。わかってください。やっぱり私達は現実の世界で逢ってはいけなかったのよ・・・。」
彼女の頬を大粒の涙が零れ落ちた。
私は何も言うことができなかった。
そして二人は何も言わないまま、永遠の時間が刻まれていく。どのくらいったのだろうか？　私はようやく自分の気持ちに整理をつけた。
「そうだね、ここで終わりにした方がいいかもしれない・・・。」
私は彼女に静かに言った。

17．孤独

あれから私は異国の地でとてつもない孤独感に襲われていた。今まで一番大きい存在だった『彼女』と彼女を失ったこと。そしてその現実の中でこの国にいる私は、まさに天涯孤独としか言いようのない存在になってしまった。

彼女と別れたあと、私はしばらく国立美術館の中をただ呆然としながらさまよっていた。どうしてよいかわからなかったのである。

ふと気付くと、自分の目の前に大きなゆりの絵があった。力強いタッチで生命力に満ち溢れている。名前を見ると、「ヴィンセント＝ヴァン＝ゴッホ」と書いてあった、私はなんとなく納得してしまった。

作品の製作年月を見ると、彼の死ぬ一年前のものであった。この作品からは、その後の彼の狂行も死も想像できない。生きるための躍動感が強く表現されている。

私もそういえば、さっきまでこんな風に生き生きとしていたような気がする。

でも今は・・・。

彼女を失った今は・・・、もう。

自分の中で時が止まった・・・。

私はその絵の前で意識を閉ざした。

それからどれくらいたったのか・・・？

気がつくと私は夜のダウンタウンを歩いていた。カクテルをもう何杯飲んだだろうか？既にまともにあるけないほどの酩酊状態であった。私は行き場のない思いに潰されないようにただただ耐えるしかなかった。

やがて、頬を暖かいものが伝わってきた。

涙だ。一縷の涙・・・。

私は『彼女』を愛していた。彼女を愛そうと思った。両方ともか

けがえのないものであった。
だけど今私の心に残っているものは、そうであったという事実だけだった。

翌朝私は荷物をまとめると、足早に空港へと向かった。この街にいると彼女のことを考えてしまい、耐えられない気分になった。愛するが故の苦しみ、それが私を一刻も早くここから立ち去らせたい気持ちにさせていたのだった。
出国審査を受け、ゲートに着くとようやく気持ちが落ち着いてきた。また明日から仕事をしなければ・・・。今はそのことで全てを忘れようと思った。もう二度とこの地を訪れることはないだろう。いい思い出といいうのはあまりにも悲しすぎる結末であるが、彼女が言っていたように私の人生も時が経てば変わるはず。そうすればこの思い出も自然と昇華していくだろう。私にはそう考えることしかできなかった。
飛行機は定刻を少し遅れてニューヨークへと飛び立った。上空に達する頃には私は緊張感から解放されて、わずかばかりの眠りに落ちた。
このひと時がもしかしたら最後の休息だったのかもしれない・・・。

18．終わりの終わり

夕刻ニューヨークのホテルに戻ると、大変な出来事が待っていた。翌日には自分の会社と提携合意をするはずであった相手先が、ライバル社に買収されることが今朝発表されたというのだ。その情報が友人から入ったのである。これは私がいままでやってきた努力が全て水の泡になることを意味していた。

私は慌てて日本にいる上司に連絡を入れてみたが、既にこの話も伝わっており、彼もどうしたらよいかわからないほど混乱していた。

「もはやこのプロジェクトは終わったと思うほかない・・・。」

彼の最後の言葉は痛々しい限りであった。

私は力なく電話を置いた。何もかも終わってしまったような・・・、気がした。

愛も、仕事も、家族も・・・。私の全ては大きな音を立てて次々と崩れ去っていく。もはや私に残されたものはなかった。

しばらくして、友人から電話があり、夕食を一緒にしようと言ってくれた。私を心配してのやさしい心遣いであった。しかし、昨日彼女を失い、今日仕事に失敗したような状態では彼と食事を食べることが、更に自分を惨めにさせるような気がしたので、そういう気にはなれなかった。残念だけど辞退させてくれ、と頼むと、

「気持ちはわかるけど、あまり考えないほうがいい。ニューヨークの街並みを見ながらゆっくりするといいよ。何かあったら相談に乗るから明日また電話するよ！」と優しく励ましてくれた。

電話を終え、ベットに身を投げると初めて自分がとてつもない静寂の中にいることに気がついた。そして直後、耐え切れないやりきれなさが私を襲ってきたのである。

「これから自分はどうやって暮らしていけばよいのだろうか？」

私にはわからなかった。

突然目の前に黄金色した遥かなる大地が見えたような気がした。あの南仏のようなランドスケープ、ゴッホの絵でみたような世界が私の眼前に現れたような感じだった。

その景色はすべてが終わろうとしている夕暮れの状況でもあった。誰かが私を呼んだような気がした。そして・・・、何かが私の目の前ではじけた。

私はバックの中から睡眠薬を取り出すと、一気に全部飲み込んだ。私の最後の選択は実にあっけないものであった。

「所詮、人生なんてこんなもんさ・・・。」と思いながらも、内心自分がこんなことをするとは思ってもみなかった。

ホテルの冷蔵庫にあったミネラルウォーターで、喉に詰まったものを押し流すように残っていた薬を自分の中に詰めこんだ。

自分の心と裏腹にこれから起こる出来事に体中は緊張していたのであろうか？　ドクンドクンと血液の脈流が大きく響いている。睡眠薬を飲めば直ぐにでも眠くなると思っていたのに、なかなかそうならなかった。きっと頭では受け入れていても、体は来るべき運命に抵抗していたのかもしれない。

私は今、自分のこれまでの人生を振り返っていた。

幼い日々のこと、友人との思い出、妻との出会い、子供のこと、会社のこと、楽しかったこと、辛かったこと、感動したこと等々・・・。でもそれももう直ぐ終わる。

ふと彼女のことが目に浮かんだ。

「もう終わったことなのに・・・、何で思い出すのだろうか？」

私はそう自分に聞き返してみたが、その答えははっきりわかっていた。

「まだ『彼女』を愛しているし、彼女を愛したかった・・・。」

ただそれだけのことである。

その事実を最後に認めるまでには、それほどの時間は必要なかった。

しばらくどうしようかと迷っていたが、私は彼女に手紙を書くこ

とにした。
ペンと便箋を取り出すと私は筆を走らせた。
私は今、とても眠たかった。でもまだ眠るわけにはいかない。今の気持ちを例えるなら深遠のきわの手すりも無い狭い道を、眩暈と闘いながら歩いているような感じだった。いつ足元を踏み外すのだろう？　もう次の瞬間かもしれない。大きく口を開けている暗い闇の中に私が吸い込まれていく準備は既にできている。ただ私はその誘いに必死に抵抗して落ちないように耐えているだけであった。
どうしてだろうか？　なぜそんなに眠るのを拒む必要があるのだろうか？
ほんの少し足をずらせば、痛みも無く苦しみも無く永遠の安らぎにめぐり逢えるのである。受け入れさえすればいいのだ。でもそのあと一歩が踏み出せないのである。
怖いのか？　いや違う・・・。どうして？
彼女のことが気にかかっているのである。
手のひらを胸にあて、彼女のことを思い出す。もしかしたらあのときあの一言が言えれば、私の人生は別の方向に向かっていったはずだった。でもそれは今となってはもはや叶わぬ「夢」。時間を戻すことは神様でもなければできるはずの無いことだった。今の私にできることといえば・・・、ただこの現実を静かに受けとめること。そして・・・。
喉が少し渇いてきた。もう一杯だけ水を飲もう。
水差しからコップに注がれた水は、私の喉に瞬く間に流れ込んでいった。
「あぁ、気持ちが良い。」
普段あまり吸わない煙草が無性に吸いたくなった。セカンドバックから取り出し火をつける。いつもは吹かすだけで何も感じないのだが、今日のほろ苦さは何か特別なもののような気がする。
どうして？　これが最後の一本だから？

しばらくして、朦朧とした意識の中で書き綴っていた手紙の筆を置くことができた。
眠たくなってきた。もういいだろう。
私は灰皿に煙草を置くと、疲れた体をベットに横たえた。心臓が静かに鼓動を響かせている。天井を見上げるとふとあまたの星が流れていくような気がした。
私は「夢」への扉を静かに押し開けていった。
机の上に、「彼女」と彼女への「遥かなる思い」を残して・・・。
Ｆｉｎ…

１８．終わりの終わり（後書き）

思ったより長くかかってしまいました。やっとこれで完結させられました。次回の作品は、１０月くらいからでもぼちぼち書き始めようかと思っています。またよろしくお願いいたします。

瑞希祐作

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4118g/

一縷の涙

2010年10月9日02時05分発行